

石銀集落跡

仙ノ山の周辺では石見銀山の銀鉱が 16 世紀中頃より大きくなっていきました。その山の頂上付近には、比較的平坦で、背丈の低い草に覆われた、階段状の広々とした土地があります。ここは 17 世紀初期に鉱山労働者たちによる主要な共同体が栄えた石銀という場所です。石見銀山が最も繁栄した時期に人々が暮らしていた石銀の集落は、もう 1 つの重要な採掘拠点だった本谷への斜面を下る道をその中心としています。今では再建されているこの道は幅が 2 メートルほどあり、両側には数々の建物が並んでいます。精錬用の坑道の遺跡や、押しつぶされた鉱石、そして、ここから発掘されたその他の品々からも分かるように、鉱山労働者とその家族たちは、これらの家々の中で、近くの坑道から採れた銀の鉱石を選鉱し、溶解し、精錬しながら、生活と労働の両方を行っていたのです。これらの家々には火事の防止のために土壁が使われていました。また、このように孤立した場所での生活にとって欠かせない新鮮な水は近くの井戸から運ばれていました。

鉱山労働者の 1 軒の家および作業場に使われていた石の基礎は、石銀集落跡の中心地の近く、狭い坑道の前に部分的に復元されています。1990 年代に行われたこの集落跡の発掘では石見銀山の近代の歴史における最も重要な考古学的発見の 1 つがありました。灰吹（「灰吹き法」の意）法を用いた銀の精錬に利用された 16 世紀の鉄鍋が見つかったのです。当時高品質の銀を生産するための鍵であったこの技術は 1533 年に朝鮮半島から日本に紹介されたと歴史的な文書では示唆されていますが、石銀で見つかった鉄鍋は灰吹法と石見銀山とを結び付ける最初の物的証拠だったのです。

石銀での発掘は石見銀山の鉱山労働者らによる共同体の構造を解明する手助けともなりました。銀の採掘と加工はしばしば家族単位でそれぞれの家族が一緒になって行っていた仕事だったようです。集落跡での感動的な発掘物の 1 つが女性の髪の毛を結んで作ったある種のお守りです。おそらく、妻が採掘場での安全のために夫に渡した幸運のお守りだったのでしょう。